

日劇ダンシング・チームと琉球レビュー — 《安里屋ユンタ》の上演をめぐる—

高橋 美樹

Ryukyu Revue by the Nichigeki Dancing Team: Performance of Okinawan Song “Asadoya Yunta”

Miki TAKAHASHI

This study investigates the adoption of the Okinawan song “Asadoya Yunta” and its demonstration method by the Nichigeki Dancing Team, targeting their *Ryukyu Revue*. The Nichigeki Dancing Team performed from 1939 through 1948. From this study, three conclusions are drawn. First, the dancing team performed a *Revue* titled “Yaeyama archipelago,” consisting of the Okinawan Shin-Min'you (a new [at the time] and creative folk song) “Asadoya Yunta,” a common Japanese song. Second, this *Revue* was based on Okinawa, where the team traveled to twice, in 1939 and 1940, in order to study the Yaeyama dance before a stage show was planned and produced. Third, King Record Co., Ltd. did not produce a recording of “Asadoya Yunta” because Nippon Columbia Co., Ltd. possessed the copyright to the lyrics.

はじめに

本稿の目的は、日劇ダンシング・チーム¹⁾が1939年～1948年に上演した「琉球レビュー」「八重山群島」「琉球と八重山」等のレビューを対象に、《安里屋ユンタ》の採用・実演方法を検証することである。日劇ダンシング・チームとは、1935年に結成された日本劇場専属の舞踊団を指す(1943『東宝10年史』:13)。

《安里屋ユンタ》は沖縄を代表する歌であり、2つの種類が存在する。1つ目は、八重山諸島で伝承され、方言で歌われる古謡《安里屋ユンタ》である。

2つ目は、共通語で歌われる新民謡《安里屋ユンタ》（作詞：星克、編曲：宮良長包）である。新民謡は、1934年日本コロムビア・レコード（以下、コロムビア）の依頼で新たに歌詞が作られた作品である。八重山出身の歌手が新作の歌詞を古謡《安里屋ユンタ》のメロディーにのせて歌い、レコードが発売された。日劇ダンシング・チーム（以下、当チーム）が上演した《安里屋ユンタ》は古謡、新民謡のどちらなのか、という疑問が本研究の発端である。

研究方法として、当チームが琉球舞踊研究のために現地調査した記録を辿る。次に、レビュー上演に関する批評を整理する。さらに、レビューの原作者・伊波南哲（1902-1976）の活動に着目し、《安里屋ユンタ》を採用した要因と上演方法を探る。

1. 日本民謡集における《安里屋ユンタ》

まず初めに、民謡研究者や作詞家らが著した日本民謡集において、《安里屋ユンタ》がどのように紹介されているのかを整理する。長田暁二・千藤幸蔵1998『日本の民謡 西日本編』では、次のように紹介されている。

「何といっても内地で流行するきっかけになったのは、1940年(昭和15)の紀元2600年記念行事の際、東宝舞踊団が、有楽町の日本劇場で沖縄民謡の祭典を上演し、舞踊団の真田千鶴子らが、ㇿサーー 君は野中の茨の花か……と、歌って紹介して以来。真田らはキングレコードで吹込み、また公演にゲスト出演していたキングの専属歌手小西潤がこれを覚え、全国巡業の際に愛唱したこともあって、ヒット流行歌のようにパッと知られるようになった」(長田・千藤1998:363-364) (下線部筆者)

『朝日新聞』1940年10月30日～31日には、広告「奉祝紀元2600年 東宝舞踊隊記念公演」が掲載され、1940年11月1日～4日の演目「琉球・八重山・台湾」が示された。この広告によると、団体名は東宝舞踊団ではなく、正しくは「東宝舞踊隊」（1940年9月改称）である。会場は「有楽町の日本劇場」ではなく、「有楽座」である。さらに、「ㇿサーー 君は野中の茨の花か」は新民謡《安里屋ユンタ》の歌詞冒頭だが、実際にこの歌詞で歌われたかどうかは不明である。この点を本稿で検証する。

また「真田らはキングレコードで吹込み」とあり、真田らがレコードを発売したことにより《安里屋ユンタ》が流行したように読み取れるが、実際は同曲を録音していない。真田千鶴子ら3名がキングレコードで1940年6月に発売²⁾した沖縄民謡は《月ぬ美しや》《黒島口説》《まみどーま》《巻踊り》《鳩間節》の5曲である。

以上の結果、団体名、会場、録音実施の有無の情報が異なっていた。なお、『沖縄日報』にはSP『日劇ステージショウ主題歌 八重山群島』と題した日蓄堂のレコード広告が1940年に全3回掲載されていた。この広告により、確かに沖縄でレビュー関連のレコードが発売されていたことが確認できる（図1参照）。

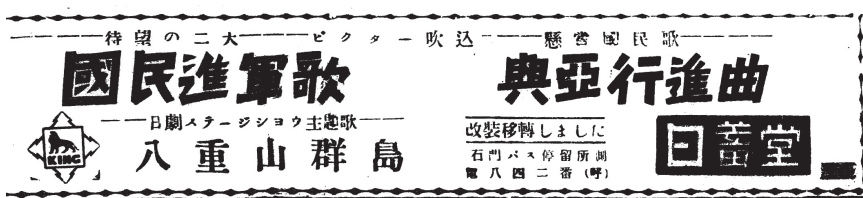


図1 日蓄堂の広告（右半分）『沖縄日報』1940年9月27日

服部龍太郎1973『日本民謡の旅3』では次のように解説している。

「八重山群島の竹富島にふるくから伝わる唄で…中略…昭和15年ごろ東宝舞踊団が歌詞をまったく改作して『さあ君は野中のいばらの花よ、暮れて帰ればヤレホンニひきとめる』として上演し、しかも囃し言葉が『マタハリの死んだら神様よ』ときこえたりすることで流行した」（服部1973:204）（下線部筆者）

服部も東宝舞踊団と称しているが、「東宝舞踊隊」の間違いである。「昭和15年ごろ東宝舞踊団が歌詞をまったく改作して」とあるが、先述したように、1934年コロムビアからレコード発売する時に、歌詞を創作した。上記は東宝舞踊隊の上演を契機に歌詞を改作したと読み取れるが、事実は異なっている。

また、時雨音羽編著1963『日本歌謡集』では、次のように記された。

「安里屋ユンタは、琉球（ママ）の八重山地方の民謡で内地人に最もよろこばれるもの

1つである。クドキ節の一首で、太平洋戦争前に、当チームによって紹介され、よろこばれた」（時雨1963:363）（下線部筆者）

下線部は当チームの上演で《安里屋ユンタ》が知られるようになり、大衆に喜ばれたと捉えられる。レコードに関する記述はないため、レビューを媒介として、《安里屋ユンタ》が大衆に流布したとも読み取れる。

以上3件の記述を整理すると、《安里屋ユンタ》の大衆への普及に、当チームの上演が大きな役割を果たした点が共通している。では、どのように同曲を習得し、レビューとして上演したのか、その点を次節以降で読み解きたい。

2. 日劇ダンシング・チームによる《安里屋ユンタ》

当チームは1939年日本・アジアの民族舞踊レビュー上演を開始する。このレビュー・シリーズは、当チームを創設した秦豊吉が1938年、宝塚歌劇団の欧州公演に同行、視察し、「どうかして外国の劇場で上演出来る日本バレーを作ろうと決心した」（秦1955:104）ことに端を発する。そして「将来の日本の舞踊は…中略…現代の日本の詩情と、現代の生活と感覚から生れたものでなければならぬ」（秦1955:104）と考えた。秦は「日本の踊りを、私らが見ておもしろいスペイン舞踊、ハンガリイ舞踊という形式にもってゆきたい」（秦1955:104）と思い、日本の郷土舞踊は「素朴な、力強い振や、単純な衣裳の美しさはありながら、まだこれを整理し、複雑化し、さらに舞台芸術化していない」（秦1955:105）ことに気がついた。この考えを具現化すべく、秦は出演者、音楽・舞台担当、演出家などを日本・アジア（台湾、朝鮮など）の各地に派遣し、舞踊や音楽を調査・習得させ、それらを基にレビューを企画、上演した。

最初に琉球舞踊のレビューを上演したのは、1939年7月1日～21日である。「第61回日劇ステージ・ショー」における「琉球レビュー」が日本劇場で披露された。曲目として《谷茶前節》《浜千鳥節》《鳩間節》《ズリ馬（ジュリ馬とも言う）》《四つ竹踊り》《月の美しや》《海の歌》などが採用された（東宝舞踊隊・佐谷1943:25-31参照）。この曲目の中に《安里屋ユンタ》は含まれていない。

《安里屋ユンタ》が初めてレビューに採用されたのは、1940年4月17日～5月7日「第74回日劇ステージ・ショー」の「八重山群島」である。「琉球レビュー」

「八重山群島」は伊波南哲による原作を基にしている。その後も、当チームは2つのレビューの曲目や演出を改編し、「琉球と八重山」等と改称して上演を続けた。表1は1939年～1948年、当チームによる琉球関連レビューの記録を整理したものである

2.1 八重山調査における《安里屋ユンタ》

1939年「琉球レビュー」の上演に先駆け、同年6月、演出・脚本家の佐谷功、装置担当の島公靖、舞踊家の葉村みき子が琉球舞踊の研究のため、沖縄本島を訪れた。佐谷と島は現地調査に関する緻密な記録を残している（佐谷1943:4-61）（島1943:62-95）。2人の記録によると、現地で見聞きした曲目は《谷茶前節》《浜千鳥節》《鳩間節》《かぎやで風》《上り口説》《四季口説》《四つ竹踊り》《天川節》《花風》《ジュリ馬》《金細工》などであった。《安里屋ユンタ》は1939年の沖縄調査で紹介を受けていない。

次に、1940年「八重山群島」の上演に向け、同年2月に実施された八重山諸島における舞踊研究調査の記録を紐解いてみる。調査には佐谷に加え、音楽担当の若山浩一、振付担当の巖きみ子、中井正子も同行し、次のように記録されている。

「一週間の八重山滞在中見た踊は、竹富島のクイチャー（巻踊）蝶の舞、マミドーマ、銭太鼓、石垣島で仲作田節、鷺の鳥節、目出度節、へんがんとれ節、布晒節、総掛踊、黒島口説等であった」（佐谷1943:33）（下線部筆者）

「夕食の後、喜舎場先生から、島の歌の話を聞き、大浜氏の三味線と歌を聞く…中略…この時哀切な『しよんかねえな節』を聞き、有名なトバラーマを聞いた…中略…踊りの始まったのは漸く9時頃であった。その順序は1、竹富島巻踊（クイチャー） 2、マミドーマ 3、チョーガ節と東里節 4、蝶の舞 5、黒島口説 6、鼓ばやし（銭太鼓踊） 7、久高板舟…中略…次に私達の所望でチョーガ節（筆者註：月ぬ美しや）を歌ってもらった。之は去年琉球レビューで歌った月の歌である」（佐谷1943:35-37）（下線部筆者）

「蝶の舞は…中略…曲は始め仲竹田節、ついで九年母木節」（佐谷1943:43）（下線部筆者）

「私達は、竹富島から石垣島へ戻り翌2月21日森田永船氏の指導の下に布晒節と総掛踊を見る事が出来た」(佐谷1943:49) (下線部筆者)

下線部は調査で見聞きした曲目だが、八重山諸島で伝承される《安里屋ユンタ》の名前は見当たらない。一行は同曲発祥の地・竹富島を訪問しているにも拘らず、曲名が挙がっていない。つまり、1939年、1940年の調査では現地の人から紹介されることもなく、調査者から要望した形跡もないことがわかる。

一方、若山は下記の記事で次のように述べている。

「こちらに来る前に東京で八重山民謡はレコードで聞いていましたが、今度、本場に来て見て民謡の数がたくさんあり節も色々あるのには驚嘆した」(1940年2月23日『海南時報』)

下線部の言説により、若山は来島する以前に、レコードを通して八重山民謡を聴取していたことがわかる。1940年当時、日本コロムビアを初め、沖縄音楽専門のマイナー・レーベルでも八重山民謡レコードは制作されていた。ただし、沖縄音楽専門レーベルによるレコードは、沖縄県内や関西の沖縄系エスニック・コミュニティにおける販売に限定されていた。よって、東京在住の若山が入手したのは、日本コロムビアによる八重山民謡レコードだと推察される。

なお、日本コロムビアは1934年に1枚(レコード番号:23138)、1935年に9枚(レコード番号:28257、28258、28455、28456、28457、28458、28459)の八重山民謡レコードを発売している。《安里屋ユンタ》は1934年に発売された28138に該当する(後述3.1表3参照)。

2.2 レビュー「八重山群島」にみる《安里屋ユンタ》

1940年「八重山群島」全6景のレビューは、構成・演出が伊波南哲、巖きみ子、振付が巖きみ子、中井正子、装置・衣裳が島公靖、音楽が若山浩一、多忠修(指揮)にて上演された(橋本1997:60)。出演は日劇ダンシング・チーム、東洋子、真田千鶴子、三鈴栄子、市村清之助らである。曲目として《黒島口説》《安里屋ユンタ》《マミドーマ》《竹富巻踊》《ムリカ星ユンタ》《蝶と牡丹》《かなよう》《あやぐ》《天川節》《目出度節》《布晒節》《へんがんとれ》《しょうか

ねえ節》《仲作田節》《四竹踊》他が採用された（1940年4月19日『沖繩日報』、1940年4月29日『沖繩日報』参照）。

4月12日の舞台稽古を視察した沖繩日報の高安記者は、次のように記している。

「第1景石垣編は全員『アサトヤユンタ』を合唱し男性は歌いながら米を搗く 次いで『マミドーマ』で鍬鎌ヘラの踊り 竹富巻踊は紺緋の衣裳で12名の群舞『ムリカ星ユンタ』は特別出演の澄川久を中心に子供たちの合唱、空に星輝き歌の終らぬうちにカーテン閉る」（1940年4月19日『沖繩日報』）。

作業歌で構成される第1景の中で、《安里屋ユンタ》《マミドーマ》《ムリカ星ユンタ》の3曲が歌われた。《安里屋ユンタ》の場面では全員で声を揃えて歌い、男声は米を搗く情景が浮かび上がる。

この情景は下記の記事からも読み取れる。

「さてそこには安里屋ユンタの伴奏に数名の逞しい男達は臼を前に米を搗き（舞踊と管弦楽が一体になって動作と音の立体美の最上線を流れる）シチガーラーを着た乙女子達はそれを囲み、子供達は大人達の隅っこで小さな臼を取り巻き、劇は進行される」（1940年5月14日『海南時報』）

2.3 レビュー「八重山群島」の批評

次に、レビュー「八重山群島」はどのように評価されたのか、批評を整理する。

「黒島口説、アサトヤ・ユンタ、マミドーマ、竹富巻踊、ムリカ星ユンタ、蝶の舞、天川踊、目出度節、布晒節、四竹踊等々の豊富な民謡と踊りが次々に展開され、ユニークな南方文化への思慕を誘う興味ふかいレビューである」（1940年4月29日『沖繩日報』）（下線部筆者）

上記は『東京日日新聞』の批評として、『沖繩日報』で紹介された記事である。沖繩民謡、八重山民謡にのせて次々に琉球舞踊が練り広げられ、沖繩独特の南

国情緒を醸し出したレビューだと捉えている。

一方、岩井勝は次のように批評している。

『八重山群島』6景の中では第1景の石垣島が一番良いと思った。黄を主調とした衣裳も美しかったし、現実から遊離しない情緒がどこかに漂っていた。アサドヤユンタ、マミドーマ、竹富巻踊りが此の中に出て来る」(岩井1940) (下線部筆者)

岩井は第1景で石垣島における農作業に伴う作業歌が盛り込まれ、日常生活から遊離しない南国情緒がステージ上に醸し出されたことを指摘している。「黄を主調とした衣裳」とは原色を中心とした南国衣裳の特徴を捉えている。

佐谷は、『八重山群島』を上演した時、寄せられた手紙の中的一篇をあげて、(筆者註：沖縄) 県人がどの様な気持ちで観覧されたかを見たい」(佐谷1943：347-348) と、沖縄出身の真栄田三郎の手紙を掲載した。全6景個々に感想を述べる中、第1景を次のように記している。

「ムリカ星の子供の歌につれ空を指さして歌ふ澄川久氏の歌のうまさ、我々らすべてを忘れて子供の頃の小生に帰って居りました」(佐谷1943:346-351)

第1景は《安里屋ユンタ》《マミドーマ》《ムリカ星ユンタ》の3曲で構成されるが、真栄田は前半2曲には触れず、《ムリカ星ユンタ》のみを取り上げた。つまり、《安里屋ユンタ》は特に印象に残っていなかったことが伺える。では、「八重山群島」ではどの演目が評価されたのだろうか。

「見た目の1番美しく華やかであったのは『蝶の踊』といふのであって、少女群の半数が牡丹の花笠をかぶって踊り半数が蝶の羽を負って其牡丹の□□たわむれ遊ぶ、おもしろさであった。然し私の一番感動したのは「布晒節」であった…中略…此□場所は実に見ごたへがあった。又、『天川踊り』といふのであらう…中略…井戸辺の踊りは全く神代さびておもしろい」(今井1940年5月8日) (下線部筆者) (□は解説不明文字)

歌人・随筆家の今井邦子は、第2景に構成された蝶の踊が「牡丹12、蝶12の

群舞」(1940年4月19日『沖繩日報』)で美しさが印象に残る場面として紹介し、衣裳や情景を詳しく描写した。また、《布晒節》の場面に最も感動を覚え、《天川踊り》に興味深さを感じている。

「島公靖の装置と衣裳の配色の美しさは特筆すべきものがあり、中でも第2景『蝶の花』の場面が最も優秀である」(1940年4月29日『沖繩日報』)(下線部筆者)

上記は『東京朝日新聞』に掲載された批評文からの転載である。今井と同様、第2景蝶の踊りの場面に高い評価を与え、島公靖による装置と衣裳をその要因とした。チーム創立者の秦は「八重山群島」について、次のように語っている。

「背景は、ごく単純な染物の模様、蝶々、海辺の岩等に過ぎないが、そこに32人のガールズが、斜めに出てくる仲作田節の振、蝶の羽根を背中につけた蝶、或は花笠を頭にのせた牡丹の『蝶と牡丹』、黄八丈のような衣裳に、脚絆をつけた『黒島口説』等、全く私らの見たこともない日本の踊りであり、これらをすべてバレエ化した私らは、これならば自分の経験から言って、欧州の舞踊界でいうスウェーデン・バレエとか、ウィン・バレエに、優に匹敵し得るものだと信じた。これを欧州で発表出来ないのは、私には残念である」(秦1955:108-109)(下線部筆者)

下線部は今井や1940年4月29日『沖繩日報』の批評と重なる部分が多い。つまり、秦らによる企画・演出側の意図がステージ構成に反映し、観客にもそれらが伝わり、批評文に結びついたと考えられる。さらに、秦は八重山諸島調査の成果とステージ化への経緯も述べているが(秦1955:107-108)、《安里屋ユンタ》に関する記述は見当たらない。

これまでの考察を整理すると、《安里屋ユンタ》は現地調査の成果とは異なる方法で、レビューに採用された曲目だと推察される。

2.4 レビュー「琉球と八重山」

1940年9月11日～24日「第79回日劇ステージ・ショー」でレビュー「琉球と八重山」が上演された。秦は『琉球レビュー』と『八重山群島』とから、さ

らに選択して、それを結びつけて、芭蕉の木1本と水平線という、たったそれだけの背景で、『琉球と八重山』一篇にまとめた。これはたった20分のバレーである」と解説している。つまり、1939年、1940年に上演した2つのレビューから曲目や構成を改編し、「琉球と八重山」と銘打ち発表したのである。先述の高安記者は「琉球と八重山」のプログラムを次のように記している。

「《貫花》(女子部員)、《月の唄》(筆者註：月の美しゃ)(真田千鶴子)、《浜千鳥》(女子部員)、《蝶とぼたん》(竹富島の踊)、《鳩間節》(新垣澄子、女子部員)、《あやぐ》(女子部員、男子部員)、《巻踊》(女子部員)、《谷茶前》(新垣澄子、巖きみ子)、《前の浜》(葉村みき子、男子部員)、《黒島口説》(女子部員)、《中作田》(新垣澄子)、《鳩間節》(葉村みき子)」(1940年9月18日『沖縄日報』、一部略)(下線部筆者)

『朝日新聞』1940年9月17日夕刊には「琉球と八重山」の広告が掲載された。「主題歌 キングレコード」との記述から、《月ぬ美しゃ》《黒島口説》《まみどーま》《巻踊》《鳩間節》はレビュー「琉球と八重山」の主題歌として、1940年に発売されたと読み取れる。このレコードは、図1で紹介したSP『日劇ステージ ショウ主題歌 八重山群島』に当たる。実際、上記の下線部4曲はSPに収録されている。

『沖縄日報』の曲目を見ると、《安里屋ユンタ》は含まれていない。だが、1で紹介した民謡集には、日本本土で流行したきっかけは当チームの上演であると、解説している。もし、「八重山群島」で上演した《安里屋ユンタ》が評判となり、観客や批評家に高い評価を受けていたなら、「琉球と八重山」でも《安里屋ユンタ》を再演したであろう。採用しなかった理由として、「八重山群島」で特に注目されなかった、または作詞に関する著作権の問題が生じた可能性が挙げられる。

長田・千藤1998:363-364が示したように、「琉球と八重山」から1ヶ月後、1940年11月「紀元2600年記念行事」を契機に同曲が流行したのが事実なら、それもまた興味深い現象である。「八重山群島」で《安里屋ユンタ》初演の際は注目されなかったものの、半年後の「紀元2600年記念行事」で再演の際、何らかの要因により大衆の支持を集め、流行を生み出したとも考えられるからであ

る。

なお、1948年4月26日～5月5日、日劇ダンシングチームによる再演「琉球と八重山」16景（於：日本劇場）では、《安里屋ユンタ》を1曲目で披露している（1948『日劇』34号:1参照）。

3. レビューの原作者・伊波南哲の活動

舞踊家や演出・企画担当者が現地で《安里屋ユンタ》を習得した記録がないのであれば、他の方法でレビューに採用したと考えるのが妥当であろう。本節では、原作者・伊波南哲の他の活動に着目し、同曲を取り上げた手掛かりを探る。

3.1 伊波南哲作1939年ラジオ「民謡めぐり“琉球の巻”」

1939年12月22日「第2回民謡めぐり“琉球の巻”」がJOAKより全国にラジオ放送された。「第1回民謡めぐり」は朝鮮民謡を取り上げ、第2回は琉球・八重山諸島の民謡を特集した。午後8時から8時30分までの30分番組である。八重山石垣島出身の伊波南哲が原作・台本を担当した。伊波の長編叙事詩『オヤケアカハチ』が1937年、東京発声映画製作所により映画化（配給は東宝）された2年後の出来事である。

音楽の編曲は伊藤昇³⁾(1903-1993)が担当した。伊藤はトロンボーン奏者で、1925年山田耕筰指揮の日本交響楽団の団員となり、山田に作曲を師事した人物である。1936年以降、東宝映画の専属作曲家として多くの映画音楽を担当しており、1939年「第2回民謡めぐり」は東宝で活動していた時期にあたる。

番組の内容は「琉球出身の白衣の勇士を慰問するため東京在住の同郷の女性達が忙しい職場の暇をさいて郷土色豊かな琉球民謡をうたうと云う構成」(1939年12月22日『読売新聞』)である。配役、音楽の担当は次のように掲載された。

【島袋軍曹】志水辰三郎 【石垣伍長】田島口文 【芙美子】飯島京子

【喜美子】山県直代、其他傷病兵 【独唱】竹本光江、鯨井孝

【合唱】オリオンコール（男声）、ホワイト合唱団（女声）【伴奏】東管

【指揮】伊藤昇（1939年12月22日『読売新聞』）（口は解説不明文字）

「出演は新派芸術座の志水、□□小劇場の田島、飯島、元新劇の山県と昭和10年の音楽コンクールに1等入選したアルト歌手竹本光江、声楽院を主宰するバリトン歌手鯨井孝さんが琉球の方言を伊波巡査に指導されて独唱する」(1939年12月22日『読売新聞』)(下線部筆者)(□は解読不明文字)と、紹介されている。

沖縄出身ではない者が琉球方言の歌詞を歌いこなすには修練が必要だと思われるが、伊波の指導により習得した様子が伺える。番組では「民謡の解説も劇中に織込まれているが次の7曲」(1939年12月22日『読売新聞』)を歌ったとある。記事に掲載された曲名、言語の種類、歌唱担当をまとめると、表2のようになる。

表2 「第2回民謡めぐり“琉球の巻”」曲別詳細 出典:1939年12月22日『読売新聞』

順	島名・曲名	言語の種類	歌唱分担	筆者の分析
(1)	琉球本島《伊計離節》	方言でうたう	【独唱】竹本、鯨井	
(2)	琉球本島《浜千鳥節》		【独唱】竹本光江	歌詞は琉球方言
(3)	琉球本島《国頭サバクイ節》	方言でうたう	【独唱】竹本、鯨井	
(4)	八重山島《ションカネー節》	方言でうたう	【独唱】竹本【合唱】オリオン	
(5)	八重山島《鳩間節》		【合唱】オリオンとホワイト	歌詞は琉球方言
(6)	八重山島《鷺の鳥節》	方言でうたう	【合唱】オリオンとホワイト	
(7)	八重山島《安里屋ユンタ》		【合唱】オリオンとホワイト	歌詞は共通語

(1)(3)(4)(6)の曲目は記事に「方言でうたう」と示され、掲載された歌詞も琉球方言であった。(2)は「♪旅宿や浜宿り草のヤレ葉の枕、寝ても忘らん、我親のヤレ片側」と《浜千鳥節》の一般的な琉球方言の歌詞1番が掲載された。(5)は「♪鳩間中森より登り蒲葵(くわ)の下に走り登り」と、《鳩間節》の歌詞1番が記された。つまり、(1)～(6)の6曲は琉球方言による民謡が採用されていた。さらに、(7)八重山島の《安里屋ユンタ》は「♪サー君は野中のいばらの花か、サーヨイヨイ、暮れて帰ればヤレホンに引止める、マタハーリヌチンダラカヌシヤマヨー」と、共通語の歌詞が掲載されている。

記事には「東宝映画の伊藤昇さんが伊波巡査指導のもとにコロムビアの琉球民謡レコードによって採譜編曲したもの」(1939年12月22日『読売新聞』)と解説がある。コロムビアは1931年～1936年に琉球古典音楽、琉球民謡、八重山民謡のSPレコード42枚を制作・発売している(高橋2012参照)。伊藤がコロムビ

ア制作のどのレコードを基に採譜したのか、SPリストと照合し、まとめたのが表3である。

表3 1939年ラジオ「民謡めぐり“琉球の巻”」関連レコード一覧 (作成：高橋美樹)

順	曲名 (記事表記)	レコード 番号	発売年	コロムビア 分類	筆者の分類	曲名 (SP表記)	演奏者
(1)	伊計離節	26813	1932	琉球民謡	琉球古典音楽	伊計離節	伊差川世瑞・新城初子
(2)	浜千鳥節	26815-B	1932	琉球民謡	琉球古典音楽	浜千鳥節	唄・蛇皮線/赤嶺京子, 蛇皮線/比嘉房子, 胡弓/ 與世田朝保, 琴/新城 初子, 太鼓/伊差川世瑞
(3)	国頭サバクイ節	該当SPレコードなし					
(4)	シヨンカネー節	28258A	1935	八重山民謡	八重山民謡	シヨンガネー節	唄/仲本マサ子, 三味線/ 崎山用能
(5)	鳩間節	26814-A	1932	琉球民謡	琉球古典音楽	鳩間節	唄・蛇皮線/赤嶺京子, 蛇皮線/比嘉房子, 胡弓/ 與世田朝保, 琴/新城 初子, 太鼓/伊差川世瑞
		28458	1935	八重山民謡	琉球古典音楽	鳩間節	唄・三味線/大浜津呂, 唄/仲本マサ子, 琴/崎 山用能
(6)	鷺の鳥節	28458	1935	八重山民謡	八重山民謡	鷺の鳥節	唄・三味線/大浜津呂, 唄・琴/崎山用能, 唄/ 仲本マサ子
(7)	安里屋ユンタ	28138	1934	八重山民謡	新民謡	安里屋ユンタ	唄/大浜津呂・崎山用 能・仲本マサ子 ピア ノ・ヴァイオリン伴奏

表3で示したように、(1)(2)(4)(5)(6)(7)はコロムビアのSPを特定することができた。しかし、(3)《国頭サバクイ節》はコロムビアで録音・発売された記録がない。なお、沖縄音楽専門レーベルにおける《国頭サバクイ節》のSPは下記の通りである。ただし、主に関西の沖縄系エスニック・コミュニティや沖縄県内で販売されていた下記のSPを、伊藤が入手できたかどうかは定かではない。

SP『国頭サバクイ節』唄・三味:多嘉良朝成・多嘉良カナ子 (マルフク、S-603、1936年)

SP『国頭サバクイ節』盛興堂歌劇員 (ツル、盛特182、発売年不明)

以上の整理により、《安里屋ユンタ》に関して、伊藤がコロムビアのSPを基に採譜・編曲したことを確認できた。さらに、伊波は「第2回民謡めぐり“琉球の巻”」の制作過程で、新民謡《安里屋ユンタ》と接点をもったことが指摘できる。よって、ラジオ番組の制作は、伊波がレビュー「八重山群島」で《安里屋ユンタ》を採用する伏線となった活動として位置づけられる。

3.2 《安里屋ユンタ》の歌詞・演唱形式（伊波南哲1943）

当チームにおける民族舞踊レビューの研究成果を記録した『日本民族舞踊の研究』が1943年に出版された。同著において、伊波は「八重山群島」と題し、八重山諸島に伝わる民謡や舞踊を詳細に解説している（伊波1943:96-107）。曲目は《巻踊》《マミドーマ節》《安里屋節》《鶯の鳥節》《ヘンガントレ節》《子守唄》《蝶の舞》《布晒節》《黒島口説》《総掛踊》《目出度節》《仲作田節》である。全12曲中、下線を引いた10曲が1940年レビュー「八重山群島」で使用した曲と一致する。伊波は《安里屋ユンタ》について、次のように記している。

安里屋節

舞台正面は南国の田園の風景。乙女たちは琉球の紺緋の上に紅の袴をかけて、白いタオルの姐さん被りとともに一幅の絵みたいである。男の報は鉢巻をして素朴な服装、男女が交互に唄っている。この歌詞は所謂、大和言葉に意識したもので、島では島の方言による民謡が唄はれている。

- 1、さあ、君は野中の茨の花か（男）
サーユイユイ（女）
暮れて還へればやれほんに引止める（男）
マタハーリス（女）
チンダラ カヌシヤマヨ（男）（以下囃子略）
- 2、さあ、嬉し、恥し浮名を立てて
主は白百合、やれほんにままならぬ。
- 3、さあ、田草取るなら十六夜月夜
2人で気兼ねも、やれほんに水入らず。

4、さあ、染めて上げましょ、紺地の小袖

かけてあげましょ、情の襷 （伊波1943:99-100）（下線部筆者）

まず《安里屋節》について説明する。八重山諸島には伝承された古謡を三線伴奏にのせて歌った歴史があり、それらの曲目を「節歌」と総称している。《安里屋節》とは「《安里屋ユンタ》の歌詞をもとに、節歌としての曲調がととのえられ」（森田1983:47）た曲を指す。森田の言う《安里屋ユンタ》は古謡を意味しており、方言による歌詞で歌われる。つまり、上記のような共通語の歌詞ではない。伊波がなぜ《安里屋節》という曲名を上記で採用したのかは不明であり、正しくは《安里屋ユンタ》である。

また、伊波が紹介したのは、SP『安里屋ユンタ』（コロムビア、28138、1934年）の共通語による歌詞である。「島の方言」による歌詞とは脈絡のない新たな歌詞が共通語で作られた。故に、伊波が言う「大和言葉に意識したもの」ではない。

一方、伊波が（男）（女）という記号で示した男女が交互に歌うスタイルは、SPに録音された演唱形式と全く同じである。コロムビアの歌詞カードに、演唱形式を加えると、次のようになる。

歌詞 1 SP『安里屋ユンタ』作詞：星克（コロムビア、28138、1934年）1番のみ抜粋

1. サー君は野中のいばらの花か （男）

サーヨイヨイ （女）

暮れて帰へればヤレホンニ引止める （男）

又ハーリス （女）

チンダラ、カヌシヤマヨー （男）

《安里屋ユンタ》のユンタとは、八重山諸島に伝わる労働歌の一形態を指している。「昔から伝わるユンタの歌い方は、2人の人(またはグループ)が交互に歌い継いでいく交互唱の形式をとっている」（金城2006:115）。つまり、古謡の《安里屋ユンタ》の演唱形式を踏襲し、新民謡の《安里屋ユンタ》を録音す

る際も交互唱で歌ったと捉えられる。そして、伊波も同著で紹介する際に、交互唱で歌う特徴を解説と歌詞双方で表したといえる。

4. まとめ

これまでの考察により、以下の3点が結論として述べられる。

(1) レビュー「八重山群島」では共通語による新民謡《安里屋ユンタ》を上演したと結論づける。その要因は2点ある。

1点目は、レビューの4ヶ月前、1939年12月22日JOAK放送の「第2回民謡めぐり“琉球の巻”」で原作・台本を伊波が担当したことが挙げられる。音楽担当の伊藤が採譜編曲の基にしたのが、コロムビア制作のSP『安里屋ユンタ』であった。伊波は番組の制作を通じて、《安里屋ユンタ》の採用方法を学び、レビューでも取り上げる契機となった。

2点目は伊波が著書で解説した《安里屋ユンタ》は歌詞と演唱形式がコロムビア制作のSPと同一であった。古謡と新民謡、双方の存在を知りながらも、解説で新民謡を優先して紹介した事実は、レビューの上演方法を特定する根拠となり得る。

(2) レビュー「八重山群島」は1939年、1940年の沖縄・八重山現地調査による研究成果とSP『安里屋ユンタ』を基に構成し、ステージを企画・演出した。この根拠として、音楽担当の若山が現地調査に向かう以前に、八重山民謡レコードを聴取していたことが挙げられる(2.1参照)。八重山において《安里屋ユンタ》を調査した形跡がないことから、SP『安里屋ユンタ』の音源を基盤として、レビュー用の音楽を組み立てたといえる。

(3) キングレコードが《安里屋ユンタ》のSPを制作しなかった理由を次のように考える。1934年、コロムビアは沖縄民謡を録音する際、コロムビア本社総営業部・來島充隆から沖縄側の調整役・喜舎場永珣に宛てて、下記の書面を送っている。「六、前以て堅く御契約御願致度き儀は当社以外他社よりの同様の交渉に应ぜざる事」(喜舎場1934年11月21日参照)。歌手はコロムビアと契約した後、他のレコード会社で録音することを禁ずる内容である。書面から、レコー

ド制作に関する個人の契約・権利について、コロムビア内で一定の規則があったと推察できる。SP『安里屋ユンタ』は1934年に既に発売されており、星克が書き下ろした歌詞を採用していた。よって、作詞家の著作権の関係により、他社であるキングは《安里屋ユンタ》を録音しなかったと結論づける。

JASRAC 出 1700795-701

註

- 1) 日劇ダンシング・チームの名称の変遷は以下の通り。1936年1月初公演は東宝ダンシング・チームと称し、同年6月に日劇ダンシング・チームと改称した。1940年9月東宝舞踊隊に改称し、1945年には東宝舞踊団と称した。1948年4月に日劇ダンシング・チームの名称を復活させた。橋本1997:513-515、1943『東宝10年史』:14参照。
- 2) SPレコード（キング、47025、1940年6月）。A面『主題歌 日劇ステージ・ショウ「八重山群島」月ぬ美しや・黒島口説』独唱:真田千鶴子。B面『主題歌 日劇ステージ・ショウ「八重山群島」まみどーま・巻踊り・鳩間節』独唱:東洋子・真田千鶴子・三鈴栄子。1941『キングレコード総目録 邦楽洋楽 昭和16年』大日本雄弁会講談社、参照。『比嘉春潮文庫 琉球レコード目録』p. 82参照。再発売は以下の通り。SP『琉球民謡』（キング、C-658、1951年）真田千鶴子、日劇女声合唱団、日劇オーケストラ。1960年『キングレコード番号順総目録 1961邦楽』キング、参照。
- 3) 伊藤昇の活動歴は、朝日新聞社のオンライン辞書サイト「コトバンク」より『20世紀日本人名事典』「伊藤昇」の項目を参照した。<https://kotobank.jp/>(2016年9月3日19:00閲覧)

参考文献

- 今井邦子1940年5月8日「八重山レヴュウ群島(下)」『沖縄日報』
- 伊波南哲1943「八重山群島」東宝舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』東宝書店、pp. 96-107
- 岩井勝1940年6月14日「八重山群島を観て」『沖縄日報』
- 内田岐三雄1939年8月1日「琉球レヴュウ グリーン・シャドウ」『キネマ旬報』688号、p. 73
- 内田岐三雄1940年8月「琉球舞踊=日劇『八重山群島』を見る」本山豊編『月刊文化沖縄』1巻1号、月刊文化沖縄社。2015『復刻版 月刊文化沖縄』1巻、不二出版、p. 15。
- 長田暁二・千藤幸蔵1998「新安里屋ユンタ」『日本の民謡 西日本編』社会思想社、pp. 362-364
- 金城厚2006『沖縄音楽入門』音楽之友社
- 菅野聡美2007「琉球レビューと額縁ショー」市川太一・梅垣理郎・柴田平三郎・中道寿一編著『現場としての政治学』日本経済評論社、pp. 41-64

- 喜舎場永珣1934年11月21日「連載 第4回死線を越えてレコードの旅へ」『八重山民報』
- 清村まり子2007「レビューになった琉球舞踊 —戦前の本土における琉球舞踊上演の一形態—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』19号、pp. 1-32
- 阪井芳貴2005「昭和戦前期の本土における沖縄芸能の受容」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』19号、pp. 37-78
- 佐谷功1943「琉球と八重山」東宝舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』東宝書店、pp. 4-61
- 佐谷功1943「後記」東宝舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』東宝書店、pp. 346-351
- 時雨音羽編著1963「安里屋ユンタ」『日本歌謡集』社会思想社、p. 363
- 島公靖1943「琉球行き」東宝舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』東宝書店、pp. 62-95
- 高橋美樹2012「沖縄音楽レコードにみる〈媒介者〉の機能 —1930年代・日本コロムビア制作のSP盤を対象として」細川周平編『民謡からみた世界音楽 —うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房、pp. 175-192
- 高橋美樹2015「《安里屋ユンタ》の伝播・普及プロセス —レコードの分析を中心として—」『高知大学教育学部研究報告』75号、pp. 203-232
- 津金澤聰廣・近藤久美編著2006『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』世界思想社
- 東宝舞踊隊・佐谷功編1943『日本民族舞踊の研究』東宝書店
- 橋本与志夫1997『日劇レビュー史』三一書房
- 秦豊吉1955「琉球・八重山・バリー」『劇場20年』朝日新聞社、pp. 103-113
- 服部龍太郎1973「安里屋ユンタ」『日本民謡の旅3 九州・奄美・沖縄』河出書房新社、pp. 202-204
- 葉村みき子1939年7月「琉球舞踊行脚」『エスエス』4巻7号、東宝発行所、pp. 72-74
- 平田伊都子1981橋本与志夫鑑修『日劇』白帝社
- 武藤優2015「朝鮮を踊った表現者たち —1930年代～1945年、日劇ダンシング・チームの活動を中心に—」『韓国言語文化研究』21巻、pp. 63-75
- 森田孫栄1983「安里屋節」『沖縄大百科事典(上)』沖縄タイムス社、p. 47
- 渡辺裕2002『日本文化モダン・ラブソディ』春秋社
- 1939年12月18日「民謡『琉球の巻』伊波南哲氏のラヂオ・ドラマ」『琉球新報』
- 1939年12月22日「ラジオ 民謡めぐり “琉球の巻”」『読売新聞』p. 6
- 1940年2月23日「日劇一行研究終へ八重山舞踊を愈々4月上旬東京で紹介」『海南時報』
- 1940年4月19日「レヴュー八重山群島／日劇の舞台稽古を見る」『沖縄日報』
- 1940年4月20日「音楽舞踊／日劇評／楽しい民謡 “八重山群島”」『東京朝日新聞』夕刊、p. 3
- 1940年4月29日「人気沸く八重山レヴュー／認められた日劇の文化運動」『沖縄日報』
- 1940年5月14日「東京通信、絶讃八重山群島レビュー感激に泣き濡れて(1)」『海南時報』
- 1940年5月20日「東京通信、絶讃八重山群島レビュー感激に泣き濡れて(2)」『海南時報』
- 1940年9月17日「広告 東宝舞踊隊 琉球と八重山 日本劇場」『朝日新聞』夕刊、p. 3
- 1943『東宝10年史』東京宝塚劇場
- 1948「舞踊組曲 琉球と八重山」『日劇』34号
- 1966『帝劇の50年』東宝
- 1998『記念誌 伊波南哲の世界』記念誌「伊波南哲の世界」刊行委員会

表1 日劇ダンシング・チーム琉球レビュー上演年表 (作成: 高橋美樹)

年月日	公演名	演目	会場名	定員	沖繩関連・曲目	出演者	演出・振付	装置衣裳	音楽
1939年7月 1-21日	第61回日劇ステージ・シヨウ	「琉球レビュー」9景 (原作:伊波南哲)	日本劇場	2920	谷茶前節, 浜千鳥節, 鳩間節, スリ鳥, 四つ竹踊り, 月の美 しや, 薙の歌	葉村みき子, NDT	葉村みき子	島公靖	宮長包, 北村 滋重, 若山浩一
1939年8月 1-8日	琉球おどり, 第3回踊る日劇		名古屋 宝塚劇場	1994					
1939年8月 9-16日	琉球おどり, 第3回踊る日劇		京都 宝塚劇場	1468					
1940年4月17 日-5月7日	第74回日劇ステージ・シヨウ	「八重山群島」6景 (原作:伊波南哲)	日本劇場	2920	黒島口説, 安里屋ユンタ, マミド マ, 竹雷巻踊, ムリカ昆ユンタ, 蝶 と牡丹, かなよよう, あやぐ, 天川節, 洋子, 真田千鶴 自出度節, 布留節, へんがんとれ, しようかねえ之節, 仲作田節, 四竹踊	日劇ダンシン グ・チーム, 東 真田千鶴 子, 三鈴采子, 市村清之助	蔵さみ子	島公靖	若山浩一, 指 揮:多忠修
1940年9月 11日-24日	第79回日劇ステージ・シヨウ	「琉球と八重山」1景	日本劇場	2920		新垣登子, 東宝舞踊隊	葉村みき子, 蔵さみ子	島公靖	若山浩一
1940年10月 18-21日		「八重山群島」女中新體 制, 菜しき日劇他	京都 宝塚劇場	1468					
1940年11月 1-4日	奉祝元2600年 東宝舞踊隊記念公演	「琉球・八重山・台湾」他	有楽座	1631					
1941年1月 9-10日		「八重山群島」菜しき 日劇, 泰国舞踊他	松本 宝塚劇場	407					
1941年7月30 日-8月12日	東宝移動文化隊移動公演/ 第5回目の農村出動	「琉球と八重山」 稗 しばり, 民族舞踊	大島地方 (東京府)			真田千鶴子他	構成:深野小 谷功		
1941年9月 5-8日	東宝移動文化隊移動公演/ 第6回目の農村出動	踊る日劇16景	栃木県		琉球月の歌, 黒島口説, 鳩間節		構成:深野小 太郎		
1941年9月 27-28日	東宝舞踊大会		東京 宝塚劇場	2810	琉球舞踊	新垣登子, 東宝舞踊隊			
1942年2月 4-13日	第104回日劇ステージ・シヨウ	「琉球と八重山」1景	日本劇場	2920			演出:佐谷功, 振付:新垣登子	島公靖	
1942年10月31 日-11月25日	第7回東宝国民劇	「琉球と八重山」 印度の薔薇, 信子	帝國劇場	1386			演出:佐谷功		
1943年2月18 日-3月3日	第127回日劇シヨウ	「八重山乙女」4景	日本劇場	2920			演出:東信一	島公靖	作曲:山崎三郎, 指揮:若尾徹
1943年8月	第127回日劇シヨウ	「琉球の踊り」他	国際劇場	4059					
1948年4月26 日-5月5日	日劇ダンシングチーム公演	「琉球と八重山」16景(再演)	日本劇場	2920	あざや, ゆんた, 月ぬ美しや, 浜千鳥, 鳩間節, 交遊(あやぐ), 蝶と牡丹, 天川, 子守歌等16曲	花柳かつら, 真田千鶴子他, NDT	構成:演出:佐谷 功, 振付:新垣 登子	島公靖	作曲:若山浩一 作編曲:若山浩一